

’70年代「教育調査の時代」批判——’80年代教育社会学教育調査の課題を考える——

埼玉大学 久畠 善之

1970年代が、一つの「教育調査の時代」であった、と特徴づけられる所以は次の三点である。

- 1) ’71年、全国教育研究所連盟の調査公表が、学校における「おろこばれ」の深刻さを量的に明らかにしたのをきっかけに、大量観察教育調査の結果公表が、教育世論形成に素材を提供する、という一つのパターンが定着した。
- 2) その中で、教育関係諸機関・団体・個人から、さらに他分野関連の公的諸機関や民間の団体・機関にまで「教育調査熱」が広がり、おそらく歴史上最も盛んな教育調査時代と現出した。
- 3) いくつかの新刊・雑誌をフォローするだけでも10年間で2,000を越える教育調査を見出すことができ、それを通じて、子ども・青年の上の起るという体、に、学力等の諸問題、学校における「教育荒廃」の状況、成人の学習要求の高まり、等が明らかにされ、教育世論また教育政策、教育運動に一つの方角づけを与えた。

’70年代、教育調査の時代は、教育をめぐり論議が、調査によって明らかにされたテーマに基いて行われ、という意味では大きな前進であると思われるが、同時に以下のような問題をもはらうて展開したと考える。

- (イ) 事実の客観的・科学的把握の方法論という点でどれだけの前進したか。この点での自覚的検討がどれだけのなされてきたのか。
- (ロ) 結果データの蓄積、相互比較、文脈、等の積み重ねがなされてきたか。そのために必要な〈調査とその結果に対する、批判検討〉がなされてきたか。
- (ハ) 何のための教育調査か、事実や問題をめぐり社会的要因関連を明らかにするのにふさわしい仮説、調査の手法、方法、分析の方法や観点がとられてきたのか。

以上のようなことの検討が、今一度冷静な立場でなされることで、’80年代の教育調査の課題を明らかにす

る上で重要ではないかと考えている。

本報告は、以上のような観点を据えた上で、1970～80年の11年間にわたる教育調査の主なものを抜き出し、

- ① 今日教育に関し、一連の調査を通じて何が明らかになっていったか。
- ② 調査の課題意識(仮説)——→分析の観点について、筆者の立場からの批判、検討
- ③ 調査方法論をめぐりいくつかの論点について、可能な議論をいいたい。

筆者の結論は、「社会調査としての教育調査の重要性」、そこにおいて「教育社会学の教育調査がとりわけるべき役割」というテーマである。